

『ガリバー旅行記』の背景

武内 正美

1. 科学革命とスクレブレリス・クラブ

1660年の王政復古以降、17世紀後半のイングランドは新科学の黎明期であった。自然科学を中心に諸学問が発達し、科学革命と呼ばれている。1660年にアイザック・ニュートンを会長に発足した王立協会がその顕著な例の一つであろう。なお、ここでの科学はいわゆる現代的な科学という意味に加え、哲学などの学識一般を意味している。古代の学問思想に対する新しい学問という対立、いわゆる新旧論争は当時ヨーロッパ中で議論的的となっていた。時を経て1726年、ジョナサン・スウィフトの『ガリバー旅行記』が出版される。その中でも第三部、飛ぶ鳥ラピュタと、ラガードの科学アカデミーへの旅行記の中で、ガリバーは「新科学」の知識、実験をあからさまに侮蔑している様子がある。そしてこの新科学への揶揄はスウィフトのみに付与される特徴ではなく、当時の文壇ではよくあることであった。その一つに、この風刺を主として文芸活動を行っていた、スウィフトとポーブによるスクレブレリス・クラブというものがある。

スクレブレリス・クラブはどのようなクラブであったのか。三文文士を意味するこのクラブは、当時活躍していた知識人や科学者たちの「学問の誤用、濫用(abuse)を風刺する」という目的のもとにあった。1713年ごろ発足したこのクラブは当時乱立する文学サークルとは違って、自然発生的にできたものでなく、スウィフトのグループとポーブのグループが集まって形作られており、前者のほうが政治色、トーリー党のカラーが強い。主要メンバーの一人であるスウィフトにとってスクレブレリス・クラブは、風刺の文学サークルにとどまらず、政治的な意味もあった。ホイッグ党擁護からトーリー党擁護へのスウィフトの転換時期、アディソン、ステイールらに代表されるホイッグ党寄りの知己との決別により、孤独な状態であったスウィフトにとって、このクラ

ブの萌芽は1710年の秋ごろだったのではないかと、カービー＝ミラーは指摘している。このスクレブレリアン・サタイアと呼ばれる気質はその後あらゆる作家からのオマージュを受け、18世紀文学に欠かせない気質となった。クラブメンバーにはポーブ、ゲイ、アーバスノット、パーネルなど17-8世紀を代表する文人が集っていた。クラブは政治的、文学的議論が行われる場所であり、彼らは共著で劇、散文などを発表している。

1741年に発表された『マルティヌス・スクレブレリスの回想録』(以下『回想録』)という未完の小説がある。これもまたスクレブレリス・クラブ・プロジェクトの一つであった。『回想録』は同じクラブの発起人でもあったポーブの散文全集に収められている。

『回想録』の発表は1741年であるが、1714年の時点でその構想はすでに練られていた。その後1745年までにクラブは分裂、再結成を繰り返しながら、彼らは企画を進めた。初めの再結成後の1714年、メンバーはポーブ、ゲイ、アーバスノットの三人に縮小され、笑劇『結婚三時間後』(1717)などの合作に至る。『回想録』の執筆が始まるころ、スウィフトは1713年にダブリンの聖パトリック大聖堂首席司祭に任命されており、イングランドとアイルランドを往復することになる。第二の再結成1726-29年に、『回想録』の16章と17章(最終章)を加えるが、『ガリバー旅行記』で成功を取めたスウィフト(ただし当時は匿名での出版であった)、『ダンシアッド』執筆中のポーブは参加せず、小説の大部分はアーバスノットの手ゆだねられたとされており、未完に終わってしまった。

2. 『マルティヌス・スクレブレリスの回想録』と『ガリバー旅行記』

『回想録』と『ガリバー旅行記』の二作品の関連

性は『回想録』全17章のうちの第16章にある。そこには主人公であるマルティヌスが1699年に旅に出るのだが行き先は知らせずにヒントだけをのこしている。嵐に会い「古代的なピグミー帝国」にたどり着いたこと、次の航海で難破して「巨人の国」に漂着したこと、そして第三部は「学者たちの王国」へ、と紹介されている。このマルティヌスの旅の予告は『ガリバー旅行記』の構成と明らかに類似している。

That in this third voyage, he discover'd a whole kingdom of Philosophers, who govern by the Mathematicks; with whose admirable Schemes and Projects he return'd to benefit his own dear country, but had the misfortune to find them rejected by the envious Ministers of Queen Anne, and himself sent treacherously away. (165)

「数学に支配された学者たち」は『ガリバー旅行記』に何度か登場する。同じ第三部のラピュタの学者たちは数字と音楽、天文学に支配されており、常に思索に没頭している。用があるときはその従者が棒の先につけた膀胱袋で主人を叩くことでその思索を断ち切らなければならないのだ。さらにマルティヌスに至っては、帰国後その習得した知識というのが不幸にも拒絶されてしまった、とある。

早い段階で構想されていたこの『回想録』のエッセンスをスウィフトは『ガリバー旅行記』として単独で仕上げたことになる。そして『ガリバー旅行記』とはこのマルティヌスの旅を補完するかのよう構成されている。『ガリバー旅行記』出版後、ポーブは‘Mary Gulliver to Captain Lemuel Gulliver’ (1726)という詩を、アーバスノットは*An Account of the State of Learning in the Empire of Lilliput* (1728)を執筆した。『ガリバー旅行記』に描かれなかったガリバー夫人、リリパットのエピソードを補足するようなこれら『ガリバー旅行記』のスピンオフ的なテキストは『ガリバー旅行記』がスクリプレラス・クラブの産物であるという共通認識を証明しているかのようである。

3. ガリバーとマルティヌス

それではガリバーとマルティヌスの類似性はどうか。ガリバーの旅の遍歴を見る限り、彼はマルティヌスの人生を引き継いでいるかのように考えられる。

ガリバーはノッティンガムシャーの小地主の三男に生まれ、大学を出た後医者になり弟子入りをする。そこで航海術、数学を修めた後、船医として旅に出ている。一方のマルティヌスは、作品の冒頭で一章を使ってスクレブレリス家が偉人たちを先祖に持つ高貴な血族であることが長々と述べられ、第二章でようやくマルティヌスは誕生している。「スクレブレリス家」の長男として生を受け、その父親コーネリアスから食育から、体育に始まり、修辭学、形而上学、医学などを学び、いっばしの「批評家」となる。ガリバーの学んだ学問に関しては簡単に紹介されるのみであるが、マルティヌスのほうは父親自らが息子に古くてすたれてしまった学問を学ばせる過程が詳細に描かれている。ガリバー、マルティヌスともに数学をはじめとする諸学問を学んでいること、旅に出ること(マルティヌスは予告のみであるが)は共通している上に、『回想録』と『ガリバー旅行記』の物語の連続性は否定しようもない。しかし出自の点からいえば、中産階級の三男坊と「偉大なる家系」の子孫であるマルティヌスとは単純につなげることは難しいであろう。

マルティヌス・スクレブレリスという人物はむしろスウィフト『桶物語』の語り手の三文文士と似通っている。『桶物語』の語り手は近代学問の徒である。風刺する対象を語り手にするという構造の複雑さから、初版の1704年(ただし執筆は1696年ごろ)から6年後の第五版に作者であるスウィフト(やはり匿名だが)から「弁明」と「脚注」を付することを余儀なくされた。語り手と作者本人の立場が対立しているため、その風刺内容を誤解されたからである。マルティヌスの主人公設定も早い段階からスクレブレリス・クラブ内で練られていたようである。

さらに『ガリバー旅行記』に登場する、巨人国プロブディングナグの学者をはじめ、スクレブレリス・クラブが風刺する学者たちとマルティヌスもまた共通しているといえるだろう。『ガリバー旅行記』の第二部で、小人のガリバーを巨人であるプロブディングナグ人が精密検査をし、「自然の戯れ」である

と結論付ける場面がある。

... a Determination exactly agreeable to the Modern Philosophy of Europe; whose Professors, disdaining the old Evasion of occult Causes, whereby the Followers of Aristotle endeavour in vain to disguise their ignorance; have invented this wonderful Solution of all Difficulties, to the unspeakable Advancement of human Knowledge. (93)

「アリストテレスの追従者」という皮肉をもってガリバーは学者たちを非難している。近代科学への風刺をモットーとするスクレブレリアン・サタイアは、古代的思想の都合の良い一部を無条件に受け入れる姿勢をも‘abuse’として攻撃の対象としたのである。コーネリアスも『回想録』の中でたびたび「古代思想の信奉者」として述べられている。このマルティヌスへの教育全般に関し、カービー＝ミラーは‘virtuoso-explorer theme’と評している。ヴァーチュオースという言葉は17世紀後半には科学者の意味を含んでいた。もちろん、実際の科学者とは別に、スクレブレリス・クラブが風刺するような科学者という意味も。

4. 『ガリバー旅行記』の多様性

なるべくして「科学者」となったマルティヌスと、近代人らしい教育を受け、「科学者」に対峙するガリバー。この二人は一貫して対立する立場にあるとも言えないのである。ガリバー自身も旅先で「科学者」となることがあるからだ。巨人国プロブディングナグでガリバーが火薬を爆発させて見せたエピソードが顕著な例であろう。火薬を知らない宮廷はその破壊力と残忍さにガリバーを糾弾するのだ。このように、ガリバーの視点、立場は「科学者」とその反対者との間に浮いた状態なのである。旅先々で大／小、空／地という明らかに彼自身と対立する国々に憂い、科学者と向き合ったかと思うと、馬の国では「科学者」どころか人間そのものへの嫌悪と、自分自身の存在に苦悩している。ガリバーのこの不安定さは政治政党への転換、クラブの変遷において揺らいでいたスウィフト自身の立場が付与されているように思える。

スクレブレリス・クラブの「学問の誤用、濫用(abuse)を風刺する」という活動内容はクラブ発足以前に『ガリバー旅行記』に至るまでスウィフトが持っていた性質である。スクレブレリス・クラブという媒介を通して『ガリバー旅行記』は生み出された。ガリバーとマルティヌスを同一視することは難しいが、『回想録』と『ガリバー旅行記』の関連性はどうか。ある意味で新科学が生み出したスクレブレリス・クラブ、そしてその合作『回想録』は、スウィフトの『ガリバー旅行記』の背景となっている。『ガリバー旅行記』を読み解くうえで、この合作の問題は大きいのではないだろうか。

参考文献

- Kerby-Miller, Charles, ed. *The Memoirs of Extraordinary Life, Works and Discoveries of Martinus Scriblerus*. Oxford: Oxford University Press, 1988.
- Swift, Jonathan, *Gulliver's Travels*. Oxford: Oxford University Press, 2005.

(神戸大学非常勤講師)